

教育功績等表彰者の座談会記録

国立大学法人佐賀大学教育功績等表彰規程及び国立大学法人佐賀大学教育功績表彰者推薦基準が制定され、これらに基づき、規程第2条第1項第1号による表彰者1名、規程第2条第1項第2号による表彰者6名が選出された。平成22年8月9日には、学長から学長賞として表彰状の授与式があった。同日、大学教育委員会と高等教育開発センターの共催により、表彰者の座談会が開催されている。以下に、座談会の記録を記す。

氏名	理由	基準	推薦部局
1号表彰			
堀川 悦夫	大学と社会の、新たな接続を目指した取組である「障がい者就労支援コーディネーター養成のための教育プログラム」を開発し、概算要求を獲得した。	推薦基準 第2条第2号	教養教育 運営機構
2号表彰			
小木曾 誠	指導する西洋画専攻生が、平成21年度「第45回昭和会展」において、最高賞である「昭和会賞」を最年少で受賞するなど、熱心で的確な指導を行った。	推薦基準 第3条第2号	文化教育学部
山下 壽文	会計分野での資格取得を目指した補講を開講し、日商簿記検定試験において受講学生から多くの合格者を出したほか、そのうち1名が現役学生で初めて公認会計士試験に合格するなど、学生の資格取得に大きく貢献した。	推薦基準 第3条第3号	経済学部
増子 貞彦	平成21年度の卒業予定者対象のアンケートにおいて、「授業内容が良かった」、「授業方法が良かった」、「熱意が伝わった」等、学生からの高い評価を得た。	推薦基準 第3条第1号	医学部
田口 陽子	地域連携デザイン工房のスタッフとして、一般市民対象の「ケンチクサマーキャンプ」等の地域づくりや学生の課外活動支援に取り組み、学内外の地域連携型教育の推進に尽力した。	推薦基準 第3条第5・6号	工学系 研究科
北垣 浩志	指導する学生が、世界で初めて小豆から発泡酒を造ることに成功し、平成21年度「第5回佐賀ビジネスプランコンテスト」において優秀賞金賞を受賞するなど、熱心で的確な指導を行った。	推薦基準 第3条第2号	農学部
周 龍梅	平成21年度の卒業・修了予定者対象のアンケートにおいて、「授業内容がよかった」、「授業方法が良かった」、「熱意が伝わった」等、学生からの高い評価を得た。	推薦基準 第3条第1号	教養教育 運営機構



表彰者の座談会にて

【座談会記録】

司会 教育功績等表彰の被表彰者の方との座談会を始めさせていただきます。私は高等教育開発センターのセンター長を務めております大石と申します。よろしく願いいたします。進行役を務めさせていただきます。

まず最初に、教育・学生担当理事の瀬口先生からごあいさつをいただきます。

瀬口 ただいまご紹介いただきました瀬口です。よろしく願いいたします。

一言ごあいさつを申し上げます。先生方のご受賞、改めておめでとうございませう。本学部の教育の充実・発展に顕著な功績を上げられました堀川先生、それから授業の実践面にすぐれた成果を上げられた小木曾先生、山下先生、増子先生、田口先生、北垣先生、周先生、心から敬意を表するとともに感謝を申し上げます。

ご承知のように、先ほどもちょっと出てきましたけれども、教育先導大学を目指しております本学において教育が一番重要な事項の一つということでございます。現在、検討中の本学の全学教育機構発足に向けた取組も、こういった観点から進められているということでございます。先生方のすぐれた功績とか成果が核となって本学の教育活動の活性化につながり、さらには近い将来に、先ほどもありましたように本学の卒業生が国内外で活躍するような人材に育ててくれることを願っております。

実は私も現役のころ、こういったはえある賞をぜひ頂きたいと思っていましたが、夢かなわず現在に至っております。先生方の受賞、本当にすばらしいなと思っております。先生方はいろいろとご活躍になる場面があるかと思いますが、どうか本学の教育の発展のために今後ともご協力ご支援のほどをよろしくお願いしたいと思っております。今日は本当におめでとうございました。

司会 これからは、着席したままで進めさせていただきます。

この座談会ですけれども、教育功績等表彰というものが平成20年度に制定されまして、今回で3回目になります。毎回、被表彰者の先生方に集まっていただいて座談会を開催しております。これは大学教育委員会と高等教育開発センターが共催という形で開催しております。今も大学教育委員会の委員長の瀬口先生からごあいさついただきました。この座談会は、功績等表彰の表彰規程を見ますと、第1条に国立大学法人佐賀大学の教育活動の活性化のためとあり、これが目的というか、趣旨になっております。ですから先生方の受賞された理由がいろいろありまして、それぞれの内容で受賞されています。先生方のそういう成果を学内外の教員、関係者に知らせることで活性化につなげる、そういう趣旨でこの座談会を開催している次第です。

それではまず、今言いましたように先生方の活動状況を説明して頂きたいと思っております。

1号表彰の堀川先生の方からお願いしますが、堀川先生が1号表彰を受けられた理由は、障がい者就労支援コーディネーター養成のための教育プログラムを開発されたということです。これは概算要求に採択されたということですが、既に1年前から障がい者就労支援コーディネーター養成プログラムという事業が開始され、実際に事業が進んでおります。

それでは堀川先生から、まずこの受賞されました内容に関してご説明いただけないでしょうか。

堀川 平成21年度から24年度を予定しております。文科省の教育改革推進経費で取り上げさせていただいております。合計すれば億を超えるお金にはなるんですが、その理由にもありますとおり、概算要求を獲得したと、まさに獲得したという段階でございまして、本来24年度で終わって、このぐらいの

方をコーディネーターとして養成できたんだというふうな時点で本来であればお認めいただければよかったんですが、今のところ、まだ「概算要求を獲得した」で終わっております。

ここから、今、都合2年目ですので、3年、4年というふうにかけて実際にコーディネーターを養成していかなければなりませんし、それを多分文科省に報告する必要がありますので、これだけのお金をかけて一体何名を養成したのかというのはすぐに文科省から問われることになると思いますし、大学からも問われることになると思っています。ですから、ようやく始まったところです。

4年間の間で何名の学生諸君をコーディネーターとして養成できるかということもさることながら、今、私どもの問題というか、次の段階で困っておりますのは、24年度で概算要求が終わった後、それだけの教育を文科省の建前からいえば、その後は自前でやらなければなりませんので、それは一体可能かどうか。さらには今、任期付で仕事をさせていただいている教員が今のところ2名、まもなくそれが3名になりますが、この先生方のお仕事をどのように評価すべきかというふうな問題がいろいろございます。

このプロジェクトを始めてみて初めてわかったんですが、学部が全学にかかわるような提案をするということは、どうやら初めてだったようでして、なかなかそれをご理解いただけなかったですね。医学部が提案したんだから医学部が面倒を見るのは当然ではないかというふうなお話を各所でいただいて、いや、それは医学部の何かのプロジェクトとしてやっているのではなくて、大学全体で起案したものなんだというふうなことを何度も説明申し上げたんですが、わかっただけないところもかなりありまして、いまだにその主張はしているところです。

ですから今回、実際にこのプログラムを動かしてみますと、今のところプログラムを履修している者が74名おりますが、その中で医学部関係者は11名ということです。学部

で割ればちょうどそのぐらいの人数であります。少なくとも医学部のためのプログラムではないということはぜひご承知いただきたいと思います。

さらに大学全体にかかわるプランを提案した場合に、さまざまな規程を直す必要が出てまいりまして、午前中の高等教育開発センターの会議にも出ておりましたが、なかなか全体として取り扱うのは難しいなど、あるいは時間がかかるもんだなというふうに思っております。全学教育機構ができれば、かなり改善されるだろうと期待を寄せているところです。

そのように考えますと、こういう新しいプロジェクト、あるいはアイデアをぜひ学内に共有していただく、あるいは共通の認識を持っていたけるような情報発信を私どももしていかなければなりませんし、先生方にもぜひその辺ご協力をいただきたいと思えます。以上です。

司会 どうもありがとうございました。本当は1号の堀川先生から2号の6名の先生方に、一旦話をさせて頂いてから、座談を始めようと思っておりましたが、堀川先生と増子先生がお時間がないということなので、今お聞きしたいと思います。

堀川先生は、こういう全学的なプログラム以外にも幾つか走り出しているものがあるんですが、堀川先生は、概算に採択された全学的な教育プログラムが大学高等機関で行われる意義をどういうふうにお考えでしょうか。

堀川 やはり大学を特色づける上で非常に重要だろうと思われま。それはなぜかと言いますと、私どもの概算要求、実は私、担当が2つ目なんですけれども、初期の平成17年から19年、これもいわば社会的な弱者の方のための教育を行っていくという、そんなことをやっています。21年から24年までを、さらに障がい者というふうにと化しておりますが、就労支援のコーディネーターというふうなところで社会的な領域の問題に取り

組まさせていただきます。そういうふうに社会的弱者の方の教育を佐賀大学が先鞭をつけてやっているということは大変特色づける上で非常に効果があるんじゃないかと思っております。

また、障がい者就労支援コーディネーターは全国初の試みですので、そういう意味でも他にないというふうな点で学生諸君に付加価値をつけてもらえる特色のあるものであらうと思えます。

角 堀川先生、全学教育機構が立ち上がったときに、障がい者就労支援コーディネーター養成プログラムを全学教育機構にどのように組み込んでいかれるのでしょうか。

堀川 私自身まだ全学教育機構の全貌が理解できておりません。また、いろいろな先生に伺っても、まだ検討中ですか、そういうお話をいただく中で難しいんですが、確かに全学教育機構の中で、私のイメージする全学教育機構の中でやっていただくにはふさわしいプログラムであらうと思っております。

司会 今、堀川先生がおっしゃったように、大学を特色づける意義があるというお考えを聞きまして、やはり今、機能別分化ということも言われていますし、大学として何が得意なのか、どこに重点を置くのかというようなこともありますし、そういう意味で正規課程の教育課程とは違う、もう少し特色のあるものをやっていくということで、堀川先生のプログラムなどは、ある程度広報的な、宣伝的な役目もあるのかなという気がします。

増子先生、どのようにお考えでしょうか。

増子 新しい学問分野というか、資格にまで持っていこうというところが「みそ」だと思うんですね。ただ、他でやっていないプログラムを立ち上げているというだけではあまり面白くないので、堀川先生の目指している「就労者を支援するような資格を取得する」というところが特色になるのではないのでしょうか。

堀川 現在のところ、本来の専攻科目の授業を取った上にプラスしてということになっておりますので、学生諸君にとっては8科目16単位の、いわば卒業に必要な科目とは一部重複するところもあるんですが、ほかの学生よりも多い単位を取って初めて取得できる。ですから、ほかの学生が持っていない資格を取るんだという点では、ある意味では当然かもしれないませんが、その分学生の負担がふえていくというふうなことになります。ですので、なるべく読みかえ可能な科目とか、そういうものを各学部でお認めいただけると、学生諸君が本来の勉強をしながら、こういう社会的に需要の高い資格を取っていただけたということが容易になるのではないかと思います。

司会 最初に、今日の座談会は内外に広く周知すると言いました。これは高等教育開発センターで大学教育年報というのを毎年出しており、そこに今日のこの座談会の模様が文章になって出てきますので、それを各大学に配付しており、学内でも配っておりますので、そういう意味で、そういう媒体を通じて広く知っていただくという形をとっております。

それでは第2号表彰の先生方ですけれども、増子先生がお時間がないということなので、内容別に分けていきます。増子先生と周先生は、いわゆる授業評価、アンケートに基づいて選出されておられるということで、お2人の先生からまずお願いしたいと思います。先生方が評価された理由として、ここに幾つか授業内容が良かったなどと書かれているのですが、ご本人はどういうことが評価されたとお考えになられているのか、あるいは何か特徴的な先生方の授業方法等がございましたら教えて頂きたいと思えます。

まず増子先生の方からよろしく申し上げます。

増子 授業内容とか授業方法がよかったというふうに挙がっていますけれども、これはアンケートの様式が、そういうコメントに丸をつけるというようになっているので、こう

いう格好になっているんですけども、決して特別な授業内容とか方法をやっているわけではありません。医学部のアンケートは卒業間際の6年生の学生対象のアンケートなんですけれども、恐らく私が教育している基礎医学は、1年後半から2年生が中心の授業なんですけど、そのときは何か訳がわからんことを詰め込まれていると感じるけれども、卒業する時点になってくると、その意味がわかって来た、ということを経験に少しは感じてもらっているのではないかと思います。私としては、そのことが一番今回の受賞でうれしいところです。

ですので、特別な授業をやっているわけではなくて、ただ自分自身で振り返ってみて、これだけは言えるかなというのは、学生の教育に対しては面倒くさくても手を抜かないということに関しては、できるだけ貫いてきたつもりです。

このアンケートの中で、授業時間以外によく対応してくれたというのもあるんですけども、学生が試験の結果を聞きにくると、1人あるいは数人ずつ全てに対応しています。1回の試験が終わると1週間ぐらいの間、ほとんど毎日、自分の仕事をしている合間に学生が来るわけですけども、いろいろ個別に話をするのが一番の教育なのかなという感じを持って対応しております。限られた授業時間で伝えられるのは、いかに何をこれから学んでいくかのガイドしか話せないわけですが、それでも学生は、どのような目的意識を持って、どういうふうに学習したらいいのか、この時点ではなかなかわからないんですね。そここのところを、個別の試験結果を解説しながら、将来の自分のため、それと医学部の学生ですので将来診療を受ける私たちのために今なにをすべきか、ということを経験に言っています。

司会 特には学生からの質問に適切にどうか、柔軟に対応されたということが評価が高かったということでしょうか。

増子 質問というよりも、一人一人の学生に

対して、将来医者として長い診療活動をするわけですけども、そのときに自分自身が振り返って患者さんに喜ばれるような診療ができたというふうになるためには、今しっかりしたものを身につけなきゃいかんよということを言っています。そういう学生が巣立つことが、診療を受ける患者の皆さんと、学生自身の両方の幸せにつながるんだということが少しでも伝わればと思っていますけれども。

司会 周先生、お願いします。

周 中国語を週に1回だけ1時間半ぐらいの授業時間で、人数も昔はもっと多く、クラス50人60人クラスもあったんですが、最近30人ぐらいになっていますね。1時間半の、週に1回だけの、しかも今の学生は予習とか復習をする習慣がないので、どうやって1時間半の中で授業に興味を持たせてもらえるかが課題です。わかりやすく、発音の段階が終わったらすぐ少し中国語が話せるように、そういう教え方になるよう自分なりに工夫しています。それから日本人の学生はやっぱり褒めないとなかなか向いてくれないので中国人の学生と違って、日本に来る前は中国人の学生に日本語を教えていたんですけども、中国人の学生は褒めるとうぬぼれになります（笑）日本人の学生は褒めないと、もうしょんぼりになってしまうんですね。

それからやはり授業中に居眠りさせないこと。もうとにかく間違ってもいいから大声で話してもらいます。1時間半だけど、大体30人のクラスは一人に4回か5回ぐらい発言する機会を与えるようにします。そしたら自分は次になるかもしれないからと、そういう緊張感を覚えます。いい刺激になります。

教える内容も、1年生のときは発音だけど、1年間通して大体少ししゃべるようになって、2年生から少し文化と歴史、中国事情などを教えることによって、例えばお茶の話だったら中国のお茶はこういうもので、じゃあ、日本のお茶はどうなのかと宿題にして、学生たちも日本、祖国のことを再認識するきっかけ

けになるとだんだん興味がわいてきて、2年間終わるとき少し惜しいような気持ちになります。

昔は単なる学位というか、単位を取るための授業だったんですが、最近は真剣になりましたね。というのは彼らにとっては将来ひよっとしたら仕事は中国語を使うことになるかもしれないという実感がわいてきたのは幸いなことで、教えやすくなりました。ただ、やはり語学のクラスで30人でもちょっと多いですので、できれば10何人ぐらいのクラスにして下さると学生たちがもっとたくさん発言できるというか、当たるようになると、もうちょっと上達するかなと思いました。

司会 日本文化との比較とか、例えばそういうことをされて学生に興味を持たせるということ、あとは語学だったら特にインタラクティブな、学生とやりとりしながら授業を進めるというか、一方的に教員が講義をするのではなくて、学生自身に参加させるということがやっぱり重要だろうなとは思っています。

皆本 途中で来なくなる学生はいないのですか？

周 2年生のときも同じく私の授業を取る学生がほとんどです。たまに1人いますが、それは大体3年も4年もずっと授業が始まる前に「先生、私、今年絶対やる」と言って、ちょっと2〜3回やったらまた姿が消えてしまいます。来年も再来年もまた来ます。3〜4年も、一番長いのは6年か7年の場合また来る学生がいます。結局私の授業だけじゃなくて多分、他の先生の授業も同じようにある現象でしょうね。

皆本 日本人は内気だから授業でしゃべらないといけないと思うと、なかなか出席しにくいかもしれないなと思って。

周 学生によって本当に1年生のときは控え目で、もの静かですが。女の子は特に1年生のときと比べて2年生のときは、性格が変わるくらい中国語の授業をとることによって

大分発言することができるようになります。

皆本 男の子はどうですか。あまり変わらないですか。

周 何というか、一番優秀なトップの子はやっぱり男子で、真ん中いっぱい優秀な女子、最後はまた男子。(笑) 例えば漢字の勉強になると男子がやっぱり強い。女子学生は、発音をまねするのが上手なんですね、だけど論理的に物を考えると男子学生がやっぱり得意。バランスをとる為に、今日の授業は漢字をやるぞと言うと男子学生が元気になります。来週は発音を中心に、そうすると女子の方が物をあまり考えずにじゃんじゃんできますね。(笑) その方が逆に語学勉強に向いています。

米山 増子先生にお聞きするんですけど、基礎医学の科目というのは1年生、2年生が対象で、アンケート自身は6年生のときに来るわけですから、4年前の、あるいは5年前の授業ですね。それなのに、これだけいい評価を得ているというのは、ある意味非常に印象が強くてすごいと思うんですけども、その間に学生とコンタクトとかというのはあるんですか。

増子 私は1年生の後半から2年生の間の授業と、それから4年生で1カ月の間に、5回の実習があるんですけど、学生の印象に残っているのは、やはり卒業直前の臨床実習の先生なんです。ですので、ちょっとこのアンケートに仕組みがあって、臨床医学系のグループと基礎医学系のグループに分けて、その中でインパクトのあった先生ということでやっています。6年後に評価されることになるので、新しく着任された方の結果が出てくるのは結構時間がかかるということになります。私が今回評価されたのは6年前に入学した学生ですから、法人化直後に指導した学生で、その後は私のちょっとごたごたしていた繁忙時期に当たっているので、今後評価がぐんと落ちるかもしれません。(笑)

司会 それでは、次の話題に移りたいと思いますが、小木曾先生ですね。先生は理由から言いますと、第45回昭和会展において最高賞である昭和会賞を学生さん、これは最年少で受賞されたということで、つまり、学生指導において顕著な成果だったということが表彰の理由だと思います。

それと小木曾先生と同じような形で言いますと、北垣先生も学生さんが21年度の第5回佐賀ビジネスプランコンテストにおいて最優秀賞を受賞されたということで、その指導において功績が評価されています。そのお2人の先生方、学生の指導ということで共通していると思いますので、小木曾先生からどういうことで受賞されたかということをご説明頂けますでしょうか。

小木曾 難しいですけども、なかなか文学とかの業界ほど認知されていませんが、美術の業界では昭和会賞というのは本当に直木賞、芥川賞ぐらいに匹敵する賞だと思ってもらって結構だと思います。賞金が一応200万円。今、大学院の2年生ですけども、大学院の1年生のときに受賞しました。私自身が赴任して今年で5年目に入んですけども、やはり大学という場ですので、4年という周期で物事を考えて、4年の中で一つの学生の成果というのを出しにこうと努めてきました。彼女以外にももちろん大きな賞を取っている学生がいるのですが、こういった成果が出てきたということは非常に喜ばしく思います。もうちょっとリストアウトしていろいろやっていくことが多々あるんですが、話し出すと多分2時間ぐらいになるので、やめます、今日は。また、聞いてください。

司会 北垣先生、いかがでしょうか。

北垣 小豆から発泡酒をつくるという、このテーマを設定したのは、私は佐賀大学に来たばかりで研究室を立ち上げるために研究費を稼がなくてはならず、かつ学生さんの就職のことを考えなくてはいけないわけですが、このビジネスプランコンテストを見たとき、よし、これだと。学生さんの就職のためにな

って、かつ地域と連携して、かつ地域のお金が取れて、かつ全体としてうまくいくのはこれかなというふうに思って、このテーマを設定したんですね。それでマスコミとかにも取り上げていただくことができ、学生さん本人やその親御さんにも喜んでいただいているので、よかったと思っています。

司会 お2の方が共通した内容ですけども、もう1人、田口先生がおられますので、田口先生の内容を説明して頂いた後で、一緒に座談をしたいと思います。

田口先生は学生の課外活動支援、それから学内外の地域連携型教育の推進に尽力されたというふうに理由が書いてありますけれども、このことに関して田口先生の方からご説明いただけますか。

田口 私は、1年半ほど前に赴任して、まだ成果という成果は出てはいないんですけども、これまでいくつかの地域連携に携わってきました。

一つは去年の公開講座ですけども、武雄市に1週間泊まり込みのワークショップを開催して、受講者の皆さんに地域の将来像を提案してもらおうということを行いました。武雄市の人たちにもその活動成果を知ってもらおうということで、ワークショップの成果は1冊の報告書にまとめてあります。ワークショップで提案した将来像が、何らかのかたちとして具体化していくように、今後もこの取り組みを継続・発展していけたらいいなと思っています。

そのほか学内の教育シーズとして、大学の授業と地域社会のプロジェクトを連携させる取り組みなどを行っています。

私が最近強く感じていることは、佐賀大学には、東京の大学とは違った地方都市の大学ならではの大学フィールドが大変身近にあることです。大都会とは異なる小さな社会ではありますけれども、そういったフィールドつまり地域を学びの場として活用していくことで、社会に対するリアリティが見えるような学生が多く育っていくんじゃないかな

と思っています。

司会 ありがとうございます。

ちょっと戻りますけれども、小木曾先生と北垣先生が学生の指導ということで、北垣先生の方は多分、学生の研究という題材によって学生を教育するという形で教育の成果がそこに出ていると思います。小木曾先生の場合、もちろん指導は当然あるのですが、個々の受賞された学生さんの力と、小木曾先生の教育力による部分はそれぞれのくらいなのでしょう。

小木曾 半々です。僕自身はあまり細かいことは言わないんですけども、彼女に1回だけ、たしか3年生ぐらいのときに1回だけ厳しいことを言いました。絵をかいていると、やっぱりマンネリの仕事になってくるときがあって、そのときだけ1回呼び出して、実際に彼女の絵に僕が加筆するというのをしたのです。そしたら彼女が号泣して。本人は自分でもわかっているわけですね。マンネリの仕事に入って、これぐらいやらなければいけないんだというのを見せられてというのがあって、僕自身の指導自体はちゃらんぼらんで、へらへらしているだけなんですけれども、ポイントポイントだけは、とにかく学生たちのポイントとなるマンネリであるとか、そういったときだけは見逃さないようにはしています。気持ち的には学生たちが周りが切磋琢磨できるような環境整備というか、学生たちが競い合って伸びていけるような環境をつくっていくであるとか、なるべく狭い佐賀という土地を出て世界に行くであるとか、最低東京に行くであるとかということはずっと推し進めてやってきたような成果だと思います。

司会 お2人の先生とも学生の教育ということですが、それには恐らく先生方が研究室とか、あるいは小木曾先生の場合、芸術ですのでどのような感じなのかかわからないのですが、少なくとも1年生、2年生の授業とかではなくて、製作というか、理工系では研究室に入るような形かと思いますが、そういう

実際の研究とか製作とか具体的なものを、これまでになく新しいものを自分でつくっていく、そういうものを体験させながらの教育ですね。そういうのが、通常うちの大学でも農学部の場合には3年後期からありますけれども、それは4年生からということで、高学年からにしかないわけです。それがもっと低学年のときから全く同じ形ではないにしろ、学生がそれにもっと接するチャンスができないのか、そういう仕組みがつくれないのかというのが私が個人的に思っていることです。

小木曾 私が所属する美術・工芸課程は文化教育学部にある学校教育と国際文化、地域生活、美術・工芸の4課程のひとつです。美術・工芸課程は8人しかいないんですけども、うちの課程は2年生からもう油絵に分かれている。1年生時にある程度幅広い専門分野のことをして2年生時から、ある程度深い分野に入る……。

司会 それは具体的な製作に入る。

小木曾 そうです。製作に入りつつも一般的なほかの授業ももちろん受けるんですけども。

司会 技術の習得も兼ねながら。

小木曾 そうです。美術の場合は40ぐらいまでは新人と呼ばれる世界なので、大学で例えば1年間とか2年間のゼミだけでは——2年、3年、4年でも足りないんですけどね。一応そうやって2年生時から分けていくというようには昔からしているんです。他の教育学部ではそういったことは、福教とか熊大とかそういうところは大体3年生から美術は分かれていくみたいですけども、佐賀大学はやはりそういう美術というのが昔あったからかもしれませんけれども。

司会 低年時から一般の授業とかの科目の履修のモチベーションになる仕組みがないから、何のためにこの授業をやっているのか

わからないままで、ただその延長になっているところがありますけれども、早くから何か研究とか製作とか直接に携わることで学生自身がつかめるんじゃないかと、そういうきっかけになればなというふうに思うんです。

北垣 うちも受賞した学生は2年の後半から、うちのコースは2年の後半から研究生が入っていました……。

司会 2年の後半からですか。

北垣 1年が終わって2年目に入って夏休みの後からですね。うちのコースはそうなので、だから、この受賞した学生は2年のころから入って実験しています。だから今の段階で、卒論で今、大学院に行くところなんですけれども、早い段階でこれだけちゃんときちっとしたデータを出せたのは、やっぱりそのバックグラウンドがあったからかなというふうには。実験しながら授業も行って、また帰ってきて実験してとか、そんな感じの生活をしていて、その蓄積があったんじゃないかなということ。

司会 2年後期から研究室に配属になっているわけですか。

北垣 うちのコースはそうです。

米山 それができるためには、あまり学生が多いとできないですね。1学年の学生数はどうですか。

小木曾 美術工芸は30名です。

米山 30名ですか。それを8名に分けて3学年分ですか。

小木曾 そうですね。多い専攻は、私とか油絵とかデザインとかというのがやはり圧倒的に多くなって、私の専攻が2、3、4、院生合わせて今32名。

北垣 うちが研究室でやっているのは3人ですね。2年の後期で3人。コース全体は26人とか30人ですが、その中から3人希望者

をとって、3人か4人を2年のころから配属させて、最初は簡単な実験から始めて基礎的なところを教えて、だんだんとレベルアップして、4年ぐらいだと、これぐらいのきっちりしたデータが出せるようになる。上の学年になるとよりいいですね。全国的な学会に出すようなかたちなので教育システムをとっています。

兒玉 3人でも2年、2、3、4、大学院合わせて5学年分。

北垣 そうなんです。なので、毎日グラント申請書を書いています。研究費が足りない、時間も足りない。必死です。

兒玉 お2人の先生にお伺いしたいんですけど、先生の指導を受けて実を結んでいく学生もいる一方、研究室にいても先生の指導に乗ってこない学生もいるのではないですか。

小木曾 います。6割ぐらいですね。(笑) 美術の場合というのは、実際、実力社会なので気づくんです。高校生で高校の中で一番力があっても、そういう人たちが集まっている場所なので、ああ、無理だなと気づくんで、そういった学生には楽しい就職活動の仕方とか、そういったことをなるべく教えていくようにして、面接であるとか履歴書の書き方とか、そういう指導をやはり積極的にはしています。

兒玉 芸術の分野ですと、半分は先生の力で半分は本人の力ですね。

小木曾 そうですね。

兒玉 北垣先生はいかがですか。

北垣 今のところはまだ、佐賀大学に来てまだ2年4カ月しかたっていないので、今のところはまだ。結構リーダーみたいな学生さんが結構いろいろフォローしてくれるんで、僕もある程度……。やっぱりいい学生、学生との頑張りがみんなで頑張っているという雰囲気になって、今のところはそういうのはない。ただ、手法的にはできるとは思うんで

すけれども、特にそうやって自分から、僕の方からやんなきゃだめだよとか、そういうのは言わないようにはしているんですけども、やる子にはサポートしようと。やらない子には見るとやっぱりリーダーみたいな学生が何とか乗せていってくれているような感じで、今のところはみんなやる気を持ってやってくれています。

児玉 もどかしくはないですか。

北垣 いや、それは自分のレベルで判断するのはちょっとあれですから、最初は多少できなくても当たり前なので、だんだんと。それこそ4年ぐらいになって深く受けるようになればいいかなと。最初の2～3年のときは、ちょっとガラス瓶を割っても「いいよ。稼ぐから、僕が」と言ってます。(笑)

司会 田口先生、工学系研究科で指導されていますけれども、理工の都市工学科では多分4年生から配属じゃないかと思うのですけれど。

田口 都市工学科は3年生の後期に研究室配属されます。そこから本格的に研究室活動が始まります。

司会 その辺のことは、どういうふうにお考えですか。

田口 私も同様に、低学年のときから研究室活動のような機会が与えられればと考えています。授業では学生が受動的になってしまう傾向がありますけれども、社会勉強というか、地域社会でリアルな体験をして授業で学んでいることの社会的意義と職業的意義を学ぶことが必要なんじゃないかなと思ってます。現在、立ち上げようとしているのが、都市工学科の学生有志を中心としたコミュニティデザインクラブというものです。4年生と3年生を中心に活動を始めているところで、後期からは2年生も受け入れる予定です。都市工学科の場合は建築設計の演習があります。3年生は小学校の設計課題に取り組むのですけれども、その授業との企画とし

て、地域連携した学生活動の支援を行っています。熊本市の宇土小学校で建設現場が進行中なのですが、学生たちが主体になって、その見学会を開催したりと、その設計者を呼んで講演会と作品発表会も企画したりしています。もちろん教員が学生地域社会との間に入ったりして、2年生から4年生までが主体となった大きな研究室活動みたいなものの仕掛けづくりと仕組みづくりに取り組んでいます。成果はまだ出ていませんが、これからが楽しみです。

司会 田口先生の表彰された地域計画、これは正規課程外の、いわゆる課外活動に相当するもので、中教審の答申等でも正規課程の教育だけじゃなくて課外活動も含めて大学というのは良くしていくべきじゃないかということが言われていますけれども、田口先生が課外活動を大学教育としてどのようにお考えか、お聞きしたいと思います。

田口 一言で言えば全人的なと言っていいかなと。知識教育というのは授業内でできるわけですが、余程やる気のある人でないと、その知識が社会に出てどのように役立つのかというその先を学ぶことがなかなかできない。学生自らが一職業人として、そして一市民として社会に出てから、どのように生きていくのかということも考えながら、主体的に学習を進めていけるようにするためには、ある種の環境じゃないですけども、社会で起こっている物事に対するリアルな観察力・洞察力を磨いていけるような環境を用意してあげることが重要じゃないかと考えています。

司会 やっぱりそういうものは正規課程の授業の中に組み込めないですか。やっぱり課外活動としてじゃないと機能しないと。

田口 やっぱり学術的なフィールドというのは、それはそれでプロテクトされるべきというか、建築の学術的分野だったら歴史や構造もあればいろいろですけども、そこで学習したことの社会的意義や職業的意義を知

ってもらるのは難しい。私は学術的分野の教育にプラスしていくのが望ましいと考えています。課外活動で終わらせるのではなく、学内のインターンシップのようなかたちになって、長時間かけて授業と平行して走らせていくのはどうかと思っています。

司会 中教審の学士力の中で、協調力とか指導力の育成ということが言われていますけれども、そうすると正規課程の教育活動ではなくて、課外活動で補てんする方がいいのか。

遠藤 課外活動にウェイトを置くと、今度は評価とか実績というところでなかなか難しい面があると。課外活動と関係してくるんですけれども、学生の教育指導で成果を上げるためには、その前提条件として教員と学生の間の人間関係というか、信頼関係というのではないとうまくいかないと思うんですね。

美術工芸、最近私はちょっと体調が悪いので飲みに行かないんですけれども、昔はよく毎晩飲みに行くと美術工芸の学生がいっぱいいるんですね。最近ちょっと自粛ぎみで、こっちの方が難しくなっているんですけれども、じゃあ、どういう形で教員と学生の間で本当にうまい人間関係というか、信頼関係を築いていくか、それがやっぱりないと、いくら理想的な教育をやろうと思っても難しいと思うんですね。その辺何かうまい方法があれば。こっち（お酒）以外で。（笑）

小木曾 理想的というか、僕自身は4年たって5年目なんですけれども、すごくこのところ、特に僕のところの美術工芸の学生は詰め込み型で外が見えていない、狭苦しい学生が多いなと思っていたので、積極的に東京まで連れていったり、東京芸術大学というところの出身なんで、大学まで連れていったり、例えば東京で大きい個展があったら連れていったりとかして、ある程度そういうふうに目をならして行って、それが今、実際学生たちというのがそういうのを見てあこがれを持ってくれたり、実際それが夢として近くなっているとか、いろんな展開を出しているの、それを学外活動、うちは授

業として組み込むことに一応今の2年生か3年生になったときに、そういったことを学外で、例えば町の中で空き店舗になったシャッターに絵をかくとか、何か交渉して、町と交渉したり商店街と交渉したり、例えば老人ホームに行つて焼き物を教えるでもいいと思うんですけども、そういうことでも単位認定してあげられないかということで、一応、対応しました。

司会 授業を設定されたわけですね。

小木曾 あまりにも忙し過ぎる、学生が。基本的にはもっと遊んでいいんじゃないかというように、僕は考える。遊びの中であるとか経験の中から見えてくるものプラス知識というのがうまく絡み合っていかなければいけないので、できるだけ僕は学生の前では不真面目に一人の教員としている。これが彼らにとっては息抜きにもなりますし、あまりかた苦しくやり過ぎないで、いろんなことを褒めながらやっています。

遠藤 さっきからお伺いしていると、何でも早い段階で研究室に入って親密な関係を築いて教育していけば成果が上がるのかなと思うんですけども、その一方で学部だけじゃなくて大学院も指導教員と一対一の関係じゃなくて、教員集団で教育しなさいという方向性も出てきていて、そこがうまく両立できない……。

小木曾 それは美術造形がそういうのは全部全員でやっています。8人しかいないので、中間発表とかも6回ぐらい多分2年間を通してやったりとか、いろんな教員が担当を持って、「この先生に聞いたら」、「あの先生に聞いてみたら」ということで、かなり学生同士もある程度密にやって、教員同士もちょっとここはわからないから、あの先生に聞いてとかというのは、理想的な数、学生の数と教員の数というふうには見えるんですけども、ちょっと足りないです。ただ、2人ぐらい足りないんですけど、それはある程度できているような気がします。

司会 研究室とかゼミとかをやれば比較的
学生との親密さとか出てくると思うのです
が、一般の授業の中で本来それが必要なん
だろうと思うんですね。通常の授業でも履修
している学生と授業をする教員との間で信頼
関係がないとうまく授業が進められないと
思いますけれども、そのあたりは周先生、い
かがですか。

周 例えば今度の受賞の理由、授業方法がよ
かったとか内容がよかったと。私、それは多
分ほかの先生も同じようにやっていたらし
ゃると思うので、私は特にいいと思わないで
す。最後に熱意が伝わったということは、自
分は自信を持ってそう思います。というのは、
先生が一生懸命教えているところが学生た
ちに伝われば、学生たちも真剣に取り組ん
でくれるはずですよ。

それから間違っても、叱るとか、指摘する
とかじゃなくて、間違っても大丈夫ですよ
という安心感を得て学生たちがだんだん自信
を持っていきます。

それから気楽にできるじゃなくて、最初は
苦労して最後は自分の努力でできた達成感
を味わえるというのが大切です。

それから授業の雰囲気をやっぱり和やか
にすること、そういう雰囲気のなかで学生た
ちが口を開くのを容易にしてくれます。間違
っても先生はこういうふうに直してくれます。
という感じで授業の雰囲気はすごく大事
だと思います。

兒玉 どんどん当てるわけですか。

周 当てます。とにかく眠らせないこと
ですね。

兒玉 学生は緊張の連続になりませんか。

周 いや、何ていうか、緊張感はなく
てはならないけれども、その緊張感があ
って、その中から快感も味わえるとい
うか。

兒玉 できたという快感ですね。

周 そうそう。喜びが同時に味わえます。

兒玉 初めて中国語を勉強する学生が
多いのですか。

周 ほとんどですね。だけど、すぐ少
し話せるようになると、それは努力した
からということを学生に伝えます。たと
え今から旅行に行っても、向こうの方
と色々な交流ができるから、それはす
ごく興味がわきますね。

遠藤 うちの2年続けて非常勤講師の
先生を推薦させていただいて、非常勤
講師の先生は熱心なのに専任教員は何
しているんだという気がちょっとしな
いでもないんですけど、教養教育運
営機構では、非常勤講師の先生にお願
いしている割合はかなり高いんですよ。
また非常勤講師の先生が非常に熱心
にやっていただいて非常に申しわけな
いというか、ありがたいと思ってい
まして、この場をかりてお礼を申し上げ
たいと思います。

周 学生たちに、君たちのことが好き
だよということを、無意識に伝えるの
ですね。そしたら学生たちは、先生が
私たちのことを、こんなに真剣に取
り組んでくれるのだなと分かると自
分も授業をまじめに取り組むこと
になります。

遠藤 だから、その気持ちになぜ専
任教員は欠けているのかなと。(笑) 教
養教育だからですかね。自分の学科
に戻ればそれなりに愛情が出てくる
んだけれども。

司会 教員ごとのキャラクターがある
んじゃないですかね。

遠藤 でも上位は非常勤が多いん
ですよ、アンケートの結果でいうと。

兒玉 はい、そうです。上位は、ほと
んどが非常勤の先生です。

司会 そういう傾向があるわけ
ですね。

兒玉 去年も非常勤の先生でした。

周 それは多分たまにしか来ないから
でし

よう。毎日先生と向かい合うと嫌になります。夫婦と同じように。(笑)

兒玉 教養教育の場合、その授業の先生が非常勤の先生なのか、常勤の先生なのかは多分知らないと思うんです。

司会 表彰者として選ばれるというだけじゃなくて、平均的にそういう人が多いわけですかね。非常勤の。

周 学生は先生が常勤か非常勤かはわからないようですね。先生の研究室がどこにあるか、いつ訪ねたら先生がおられるかと言われたことがあります。これは私が非常勤の先生ということを知らないからでしょう。

司会 もちろん常勤の先生の中にも熱心な方が多いと思いますけれども、割合的に見ると非常勤の先生の方が多いということは、やはり常勤の教員が考えなくてはいけない部分ですね。

皆本 軸が関係していると思う。例えば我々だと工学系研究科という軸があるから、教養科目を専門科目と同じようにやっているつもりでも実は学生から見ると、違うように映

っているかもしれない。教えている学生が自分の研究室に配属されたら困ると思って指導するのと、絶対来ないとわかっている学生を指導するのでは微妙に違うかもしれない。(笑) どうでしょう。

周 自主的にやる学生もおります。つい最近試験の採点をしたばかりだけど、100点満点取る学生が何人かいます。日本人の学生は本当に記憶力がいいなと思います。それはちょっと驚きですね。

司会 今回、一般の授業の評価が良かったという先生方だけではなくて、研究室配属とか、そういうところでの学生の指導、それから学外といいますか、正規課程以外の教育での貢献をされている先生方もおられて、非常に内容はバラエティーに富んでいたと思います。こういうことが多くの先生方、教員の方に少しでも伝わって教育の改善に結びついていけばと思います。

ということで、今日はどうも本当にお忙しいところ、ありがとうございました。これで座談会を終了させていただきます。

(終了)